2023/02/18

「第 14 回関西スペイン語教師の集い」終了時の参加者のコメント
Comentarios entregados por los participantes del XIV Encuentro de Profesores de Español en Kansai al final de la jornada

- Gracias por organizar este encuentro que nos permite compartir experiencias y consejos útiles para mejorar nuestra práctica docente. Me pareció especialmente interesante la relevancia del CHAT-GPT en el aprendizaje de lenguas extranjeras, puesto que es un tema que tendrá un gran impacto en todo el proceso de aprendizaje en el futuro a corto plazo. Instructivos también los vídeos de Zumba y la actividad extracurricular del musical *In the Hights*.

- Podremos sentir *oshiegai* si nuestros estudiantes sienten *manabigai* mediante nuestras clases. ¿Son recíprocos? ¿Cómo deberían ser dichas clases? Preparamos clases en las que nuestros estudiantes hagan pequeños esfuerzos y pueden verlos (sentirlos) recompensados.

- Ha sido realmente interesante. Estoy muy contento de haber participado en esta jornada. ¡Gracias! Además, todos los temas que se han tratado en el año 2022 me han parecido de gran actualidad y muy inspiradores para reflexionar y mejorar nuestra labor docente.

- Estos son algunos puntos importantes al aprender un idioma extranjero, que deberían presentarles a los estudiantes el primer día de clases: No sólo el conocimiento de una lengua, sino presentarles otros aspectos.
  -mejora el conocimiento y desarrollo humano
  -promueve la autoconfianza y la toma de decisiones
  -conseguir un buen trabajo
  -enriquece nuestra vida a nivel social y cultural
  -mejora la flexibilidad, memoria y habilidad mental
  -descubre nuevos referentes en las áreas de interés (ciencia, política, economía, etc…)
  -mejora la capacidad de atención y enfoque

- カリキュラムの制限はあるものの、言語以外のアクティビティを取り入れる事の大切さを認識した。

2023/02/18

- 外国語を学ぶ事の意義を常に考えて、それと闘いながら進まなければならないと考えた。

- 近道や簡単な方法で答え（結果）を出す事が当たり前の世の中となった今、プロセスを重視する外国語学習の正当性について、教える立場で議論しなければならないと感じた。

- TADESKA の今年度の活動や本日の話し合い・報告を通じて、新しい時代の語学教師は前世紀よりもファシリテーターとしての役割を求められているとの印象を持った。しかし、すでに教師として教壇に立つ私たちは若い頃にファシリテーターとしての訓練を受けておらず（そもそも養成機関などほとんどなかった）本やネットで情報収集しつつファシリテータのまねごとをしているような気がしている。

- 本日の話の中で AI の発展と共に語学教師はもはや不要という考え方もあると知ったが、不要なのではなく、現代や今後の人間どうしのコミュニケーション促進のためには、語学以外での授業での学びも加えて問題解決を図るべきではないか。

- TADESKA の取り組みによってたくさんの気づきがあります。いつもありがとうございます。

- やっぱり、学ぶ意義に興味がある。11 月の taller の補足（もしかしたら 11 月に言ったかも）。コミュニケーション（＝実用）を押している限り、翻訳アプリには勝てないと思う。「翻訳アプリは、こういうところが訳せないから、授業ではそこを重点的にやるべき」といった議論もあるが、それは翻訳アプリが今より発達したら、克服されてしまうかもしれない。つまり、コミュニケーションを目的としている限り、翻訳アプリには勝てないということ。だから別の路線を外国語学習に見出す必要があるということ。

- やりがい（学ぶ意義）というのは、視覚化（学生にわからせる／見えるようにする）のが難しいと思う。午前中の小川さんのお話の中で紹介されていた学生のコメントも、curso が終わった後（つまり 1 年なり 2 年なりついてきた学生）のコメントであり、ドロップアウトした学生もいたはず。そう考えると、学びがいを感じられる「ネタ」を小刻みに準備する必要があるのだろうと思う。

- 言語教育自体が選択科目になる可能性についての言及があったが、大学においてのこの科目は、自己中心的な世界から他者との共存に向かうための、社会に出る前の最後

のとりでとしての役割があると考えると、「恐ろしい見解を持つ人がいる。これを正に変革すべく、言語教育の重要性をうったえていかねばならない」と感じた。

- 小川氏の ponencia-taller は示唆に富んでおり、教職者がどこに向かって行くべきか考えさせられた。

- Roberto 氏が「カリブ海出身者として *In the Hights* の演出に貢献したことで『役に立つ』という感覚があった」というのが心に響いた。

- 外国語能力・外国語学習においては、日本語の力と学習習慣の影響が無視できないと強く感じている。 ↓

機械翻訳の適正利用も、日常の授業における「和⇔西」の訳等々も結局は日本語力の無さに由来しているのではないか。

- わりと細かくふだんどんな授業をしているのか聞いてみたい。授業の構成、取り扱う内容・範囲、スペイン語圏に関する文化等の話をどのくらい、どんなことをしているのか。

- 英語やスペイン語を読もうとして、単語を調べて文を作ろうとしても、うまく日本語が組み立てられないようになってきている。それに気づくことができるだけでも外国語を学ぶ意義はあるのかもしれない。

- もう「～語ができる」というのはゴールではなくなっている気がする。翻訳機を使ってでも「～語で表現されているモノ」に対して興味を持たせたり、自らアプローチさせるように仕向けるのが我々の努めかもしれない。

- 「外国語≠英語」という構図をなんとか維持させたいが、やはりスペイン語を用いる就職につながらないというのがネック。

- 教室が「学ぶ場」ではなく、「教える場」になっているなあと、自分の授業について反省しました。「学べる場」をつくるべく、色々と考えて工夫したいと思います。学生たちが主体的に参加し、つくり出したもの（例文など）を共有して、授業をつくりあげていきたいと思いました。無難な授業をして、成績をつけて、単位を出して、というクレームがつかないことを目的にした一連の流れから出られたらいいなと思いました。

2023/02/18

- 教え甲斐・学び甲斐は教育現場において根源的なテーマだと思います。学生達が”単位取得”だけが目的化してしまわないよう、授業運営を常日頃考えてはいるものの、どこまで「学び甲斐」を感じてもらえているか、あまり自信はありません。今日は他の参加者と意見や経験をシェアすることにより、皆、悩みながら試行錯誤しておられているのだと感じ、励みになりました。すぐ答えが出る問題ではありませんが、今後も自問自答し続けたいと思います。後半の今年度の振り返りダイジェストもとても参考になりました。今日はよい刺激をたくさんいただきありがとうございました。

- 学生にとっての「学び甲斐」（これを「学ぶ意義」と言ってもよいと思う）は、おそらく短期（毎回の授業など)、中期（その学年もしくは全受講期間)、長期（受講期間終了後の学生の人生）というように考えるとよいと思う。短期的な満足がないと毎回の授業が学生にとって苦痛になるかもしれない。中期的には、受講期間終了時に一通りの学習の成果を実感できることが重要だろう。そして長期的には、人生のある一コマ、時として大きな転機に「学生時代にあれを学んでおいてよかった」と思えることだ。長期的視野については、彼らが将来生きる社会がどうなっているかとも関係する。教える側はそれぞれに目配りをすることが必要だと思う。外国語教育は今後縮小されていくかもしれないが、それにも負けずにクオリティを上げる努力を積極的にしていけば、それを感じ取って自分の糧にしていく学生たちは、少なからずいると信じる。外国語教育の重要性は、長期的には彼らが引き継いでくれると思う。なので、成績の如何を問わず、真摯に、興味を持って取り組みつづける学生たちの学び甲斐を大切にしていきたい。幸い、言葉は森羅万象に結びついている。どんな話題であれ、その話題を学生や教員仲間や他のみなさんと共有していきたい。

- 生徒をまきこむ授業というのが上がった。分からないといってよいといわれて話しやすかった。「甲斐」のスペイン語訳など意外に難しいと思う。Google 翻訳ではむずかしいと思った。デジタル化に教師がおいつくのが難しいことがある。特に評価などでは新しい方法を考える必要があるかもしれない。まちがわないように予定通りにすすむことを重視してしまいがちな今の流れで今日もう一度自分をみなおした。

- TADESKA は視野が広がってありがたい。今年のテーマはどれも知っているつもりで知らないことが多く学びになり、再度自分はどうだろうと考えさせられた。授業にいかすことができそうだった。

- -時間軸（中学以前-高校-大学-社会人以降）のシステム連携や知識、情報の共有が、今後必要になりそう。

2023/02/18

- 目まぐるしく変わっていく社会に対応するために自分自身をアップデートし続けるのは大変だけど、した方が良い。

- 学び甲斐と教え甲斐について考えた時、学ぶ時も教える時も「〜甲斐」を感じるまでには困難がともなうと感じました。特に大学では半年の間に「甲斐」を感じることなく終わることが多い気がします。「こなした」というようにならないために、短い期間でも「甲斐」を感じられるような工夫が必要だと気づかされました。

- ズンバが楽しかったです。一つのことをみんなでやり遂げた感じがあり、それこそ「踊り甲斐」を感じました。

- 今年度のテーマのまとめとしては、それぞれの発表者の人が異なる切り口で同じテーマについて考え、自分にはなかった視点で考えるきっかけとなったのた良かったです。

- 語学だけに限らず、学校教育全てが「実用性」を意識して行われているわけではないのに、「語学」だけが（←ちょっと言い過ぎ？）実用性を求められるきらいがある。

- 英語以外の外国語学習と言ったときに、そこに中韓以外のアジア諸語が含まれていないのは残念である。「スペイン語」だけが外国語教育の一環として生き延びる道を探るのではなく、英語以外全体で考えられると、英語以外の外国語学習・教育にも繋がるのではないか。

- 多言語共生社会の観点から学習モチベーションを維持したり引き出すのは難しいとあったが、それは大人達の勝手な見方で、今の子どもたち小さい頃からまわり（すぐそば）に多言語共生社会があり、大人以上にとけこみ、共生していると考える（参照：奈良教育大の吉村先生の取り組みなど)。その子どもの頃の経験から英語以外の外国語を学ぼうと思ったという学生に、比較的多いとはではいかないまでも出会ったことは何度もある。